

# むしる・ちぎる

岩崎宏子

## 1. はじめに

この二語は、〈力を加えて、独立した形をもつものの全体か一部分かを取り去る〉という、共通の意味をもつと思われる。しかし、対象となるものや、取り去った結果などに相違がみられるので、分析を通して、それらの相違点を明らかにしていきたい。

## 2. 分析

### 2. 1. 対象物

- (1) 草を むしる。
- (2) 草を ちぎる。

(1)と(2)は両方言えるが、意味が異なる。(1)は、丈の短い雑草などをつまんで、根元から抜くことを言い、(2)は、長い葉を途中で切ったような場合に使う。

- (3) 地面から 草を むしる。
- (4) \*地面から 草を ちぎる。
- (5) \*草を 途中で むしる。
- (6) 草を 途中で ちぎる。

同様の例文として、

- (7) \*茎を むしったら 汁が 出た。
- (8) 茎を ちぎったら 汁が 出た。
- (9) \*レタスの葉を 食べやすい大きさに むしる。
- (10) レタスの葉を 食べやすい大きさに ちぎる。
- (11) タンポポの綿毛を むしる。
- (12) \*タンポポの綿毛を ちぎる。

などがあげられる。

対象物が植物以外のもので、例をあげてみる。

- (13) 壁から ポスターを むしる。
- (14) \*壁から ポスターを ちぎる。

(13)は、あまり使わないかもしれないが、壁に貼りついたポスターを、無理矢理に全部はがしてしまうような場合には、言える。これに対して、(14)は言えない。しかし、

- (15) ポスターを ちぎる。

これは、ポスターの一部分を破く場合に使われる。

- (16) 鶏の羽根を むしる。
- (17) \*鶏の羽根を ちぎる。
- (18) じゅうたんの毛羽を むしる。
- (19) \*じゅうたんの毛羽を ちぎる。
- (20) セーターの毛玉を むしる。

- (21) \*セーターの毛玉を ちぎる。

- (22) トンボの羽を むしる。

- (23) ?トンボの羽を ちぎる。

- (24) \*折紙を むしって 紙吹雪を 作る。

- (25) 折紙を ちぎって 紙吹雪を 作る。

- (26) \*鎖を むしる。

- (27) 鎖を ちぎる。

- (28) \*セロハンテープを 手で むしって 貼紙をした。

- (29) セロハンテープを 手で ちぎって 貼紙をした。

(1)~(29)から、「むしる」は、物体に付着しているものを取り去るときに使う、ということが推測できる。

それでは、むしられるものは、物体に、どういう状態で付着しているのであろうか。

- (30) 釘を 抜く。

- (31) \*釘を むしる。

- (32) とげを 抜く。

- (33) \*とげを むしる。

- (34) 地面に 深く根をはっている草を やっと 抜いた。

- (35) \*地面に 深く根をはっている草を やっと むしった。

(30)~(35)から、物体の内部に、深くあるいは大部分入りこんで、密着しているものに対しては、「むしる」は使えない。

一方、密着していないものにも使えない。

- (36) \*机の上の 綿ぼりを むしる。

つまり、物体の表面に密着しているものに対して、「むしる」を使う。

これに対して「ちぎる」は、(1)~(29)から、物体そのものを分離するときに使う、ということが推測できる。

しかし、「ちぎる」も、物体に密着しているものを取り去るときに使う場合がある。

- (37) 手帳から 紙を ちぎる。

- (38) 花から 花びらを ちぎる。

- (39) 喧嘩をして 相手の服から ボタンを ちぎった。

この三例をみると、ちぎられるものは、物体の不可欠な一部分であることに気付く。手帳は何枚もの紙と表紙から成り、花は数枚の花びらと花芯から成っ

ている。服も、ボタンがとれていては、きちんとした服とは言えない。そういうふうにと考えると、(17)や(23)も言えるような気がする。しかし、(17)の「鶏の羽根」は、鳥肉を食べるといふ観点からすれば不可欠なものではないし、(23)は、「トンボの羽」それ自体を裂く場合に、「ちぎる」を使うことが多いと思われる。その他の例文、たとえば(4)や(14)は、絶対に言えない、「草」や「ポスター」は、それぞれ、地面や壁の不可欠な一部分ではないからである。

それでは、「むしる」が、対象物そのものを分離するときを使う場合もあるのであろうか。

(40) パンを むしる。

(41) 干物を むしる。

(42) 綿を むしる。

(40)~(42)のように、やわらかめの物質ならば、言えるようだ。しかし、次のようにも言う。

(43) パンを ちぎる。

(44) 干物を ちぎる。

(45) 綿を ちぎる。

(40)~(42)と、(43)~(45)とは、どう違うのだろうか。

これは、むしった／ちぎった結果の違いによるのではないと思われるので、2.3.の結果の分析の中で扱いたい。

## 2. 2. 分離

### 2. 2. 1. 手段

「むしる」も「ちぎる」も、通常、手で行なう動作である。

「むしる」は、これまでの例から、指先のみしか使わないことがわかる。

「ちぎる」は、(10)の「レタスの葉」、(25)の「折紙」、(38)の「花びら」などは、同じく指先しか使わない。しかし、(27)の「鎖」や、(39)の「ボタン」や、また、

(46) 餅を つかんで ちぎった。

(47) 粘土を ちぎって まるめた。

などの例から、てのひらまで含めた、手全体を使うこともある、ということがわかる。

また、「むしる」も「ちぎる」も、手や指に準ずる道具ならば、使うこともある。

(48) 箸で 魚の身を むしる。

(49) タカが 嘴で 獲物の肉を ちぎる。

### 2. 2. 2. 働く力

次に、分離の際に働く力について、考えてみたい。

はじめに述べたように、「むしる」も「ちぎる」も、

ある程度の力が加わる動作である。

しかし、「むしる」は、(11)の「タンポポの綿毛」、(18)の「じゅうたんの毛羽」などに代表されるように、あまり力を必要としない。強い力が加わる場合には、主に「むしりとる」を使う。

一方、「ちぎる」は、(10)の「レタスの葉」、(25)の「折紙」、(38)の「花びら」などのように、たいした力を必要としない場合もあるし、(27)の「鎖」、(39)の「ボタン」などのように、かなりの力を要する場合もある。

また、力が加わる方向は、「むしる」は、密着の方向と逆である。「ちぎる」は「むしる」のように密着の方向と逆の場合もあるし(27)の「鎖」、(39)の「ボタン」など)、密着の方向と垂直の場合もある(紙類など)。しかし、力を加えることによって切れる方向が定まっている場合には、「ちぎる」は使えない。

(50) ?? お菓子の袋を 切り取り線で ちぎる。

(51) ?? 便箋を ちぎって使う。

## 2. 3. 結果

### 2. 3. 1. 断片の数

これまでの例文から考えてみると、「むしる」は、むしった結果、数多くの断片ができるのが普通であるようだ。(11)の「タンポポの綿毛」、(18)の「鶏の羽根」、(18)の「じゅうたんの毛羽」など。(3)の「草」や、(2)の「トンボの羽」は、一回「むしる」だけならば断片は単数であろうが、複数回、行なう場合が多いと思われる。

この観点から、2.1.の(40)~(42)をみると、(40)の「パン」、(41)の「干物」の場合は、一回一回、分離したそばから食べてしまうのではなく、食べやすいように小さく(細かく)することを言うのであるから、むしったあとには、断片がたくさんできていることになる。(42)の「綿」の場合も、(45)と比較すると、いたずらをして散らかすようなニュアンスをもつ。

これに対して、(43)~(45)は、一回だけの動作にも使う。

「ちぎる」の他の例文を考えてみよう。

(52) 手帳から 紙を 数枚 ちぎった。

(53) 花びらを 数枚 ちぎった。

(54) 草の葉を たくさん ちぎった。

このように、複数回の動作の場合、「数枚」「たくさん」などの但し書きを要求する。(10)の「レタスの葉」の場合も、「食べやすい大きさに」という言葉が無ければ、葉を一枚、裂いただけのようにも聞こえる。

「ちぎる」は、分離する一回一回の動作に、視点が置かれていることがわかる。

### 2. 3. 2. 断片の大きさ

物体に密着しているものが、「むしる」の対象物である場合、今までの例文から、対象物は、初めから細かいものであることが多い。

それでは、物質そのものを分離する場合の「むしる」はどうかと言えば、2.3.1.でも触れたように、やはり、小さな断片ができるのが普通である。

(55) ?パンを 細かく むしった。

(56) ?干物を 細かく むしった。

(57) ?綿を 小さく むしった。

これらが、少しおかしい気がするのには、「むしる」というときには、すでに「細かく」とか「小さく」と

いうニュアンスが含まれているためではないか、と考えられる。

(58) \*パンを ふたつに むしる。

これは、「ちぎる」ならば使える。

(59) パンを ふたつに ちぎる。

「ちぎる」は、断片の大きさに、限定は無い。

(60) レタスの葉を 大きめに ちぎる。

(61) 長い草を 真中から ちぎる。

### 3. まとめ

以上の分析から明らかになった二語の相違点をまとめてみた。

		む し る	ち ぎ る
対 象 物		○物体の表面に密着しているもの。 ○比較的やわらかい物質	○物体そのもの、あるいは、その不可欠な一部分。
手 段		○指先、またはそれに準ずる道具。	○手、またはそれに準ずる道具。
働 く 力	強 さ 方 向	○あまり強くない。 ○密着の方向と逆。	○強い場合も、強くない場合もある。 ○密着の方向と逆か、あるいは垂直。
結 果		○細かい断片が、たくさんできる。	○断片の数や大きさに、限定は無い。

言語経歴：1960年2月、墨田区に生まれ、現在に至る。

(東京都立大学学生)

## きる・かぶる・はく

酒 井 恵美子

### 1. はじめに

「きる」「かぶる」「はく」は人や物の一部あるいは全体をおおうことを表す動詞であるが、従来共通語と西部方言ではその意味・用法が異なることが指摘されている。徳島県石井町では次のような用例がある。

(1) カサ キル (笠を被る)

(2) テブクロ ハク (手袋をはく)

(1)は共通語では「かぶる」、(2)は「はめる」となる。これらの例から、共通語と石井町方言の「きる」「かぶる」「はく」の間にも、従来報告されているような意味の差があることが予想される。<sup>(註1)</sup>

本論では、徳島県石井町のキル・カブル・ハクの意味を分析し、記述することを目的とする。

### 2. 分析

#### 2. 1. 分析手順

キル・カブル・ハクが、ある対象をおおうということを表すとすればどのような物がどのような対象のどの部分を、どのようにしておおうのかということが重要となろう。そこで次のような順序で分析をすすめていくことにする。<sup>(註2)</sup>

1. 被覆物——おおうもの

2. 被覆の対象——おわれるもの

3. 被覆部分——おおう部分

4. 被覆の仕方——おおい方

#### 2. 2. 構文

具体的な分析にはいる前に、キル・カブル・ハクの